

## 総合特別講演

## 静岡県の地質

静岡大学教授 岩橋 徹

新潟県糸魚川と静岡を結ぶ静岡構造線の東側にフォッサマグナとよばれる大規模な地溝帯があって、日本列島を東北日本と西南日本とに2分している。また、諏訪湖付近でこの構造線からわかれ、愛知県豊川、三重県伊勢、和歌山を経て四国・九州へ、ほぼ東西にのびる中央構造線がある。中央構造線の北側を西南日本内帯、南側を西南日本外帯とよんでいる。静岡県はこの2つの構造線が会合する付近に位置するので、日本の各地質区分がみられ、いわば日本の地質の縮図といえることができる。

西南日本内帯は広域にわたり花こう岩質マグマの<sup>(侵入)</sup>進入をうけ、高温低圧型の変成作用を受けたため、地層は片麻岩類に変わり、花こう岩類の分布も著しい。ただ、静岡県では内帯の分布は県北西部の水窪町・佐久間町の一部に限られている。

近畿以西の外帯は北から三波川、秩父、四万十の各帯に分けられ、各帯は東西に帯状に分布している。しかし中部地方では各帯は糸魚川静岡構造線に近づくにつれて北に押し曲げられ、南北に近い方向をとるようになる。

県北西部に分布する三波川帯は低温高圧型の変成作用を受けてできた各種の結晶片岩からなり、はんれい岩、輝緑岩などの貫入をうけている。三波川帯には別子式鉱床といわれる銅および金銀を含む鉱床を胚胎している。

秩父帯は弱変成の砂岩、粘板岩、チャートからなり、ときに凝灰岩や石灰岩レンズをはさんでいる。石灰岩から古生代二畳紀の紡錘虫化石を産している。

四万十帯は赤石山地(大井川流域)に広く分布し、中生代白亜紀に堆積した地層からなる。タービダイトという砂岩頁岩互層が特徴的で、ときに玄武岩質溶岩や凝灰岩をはさむ。

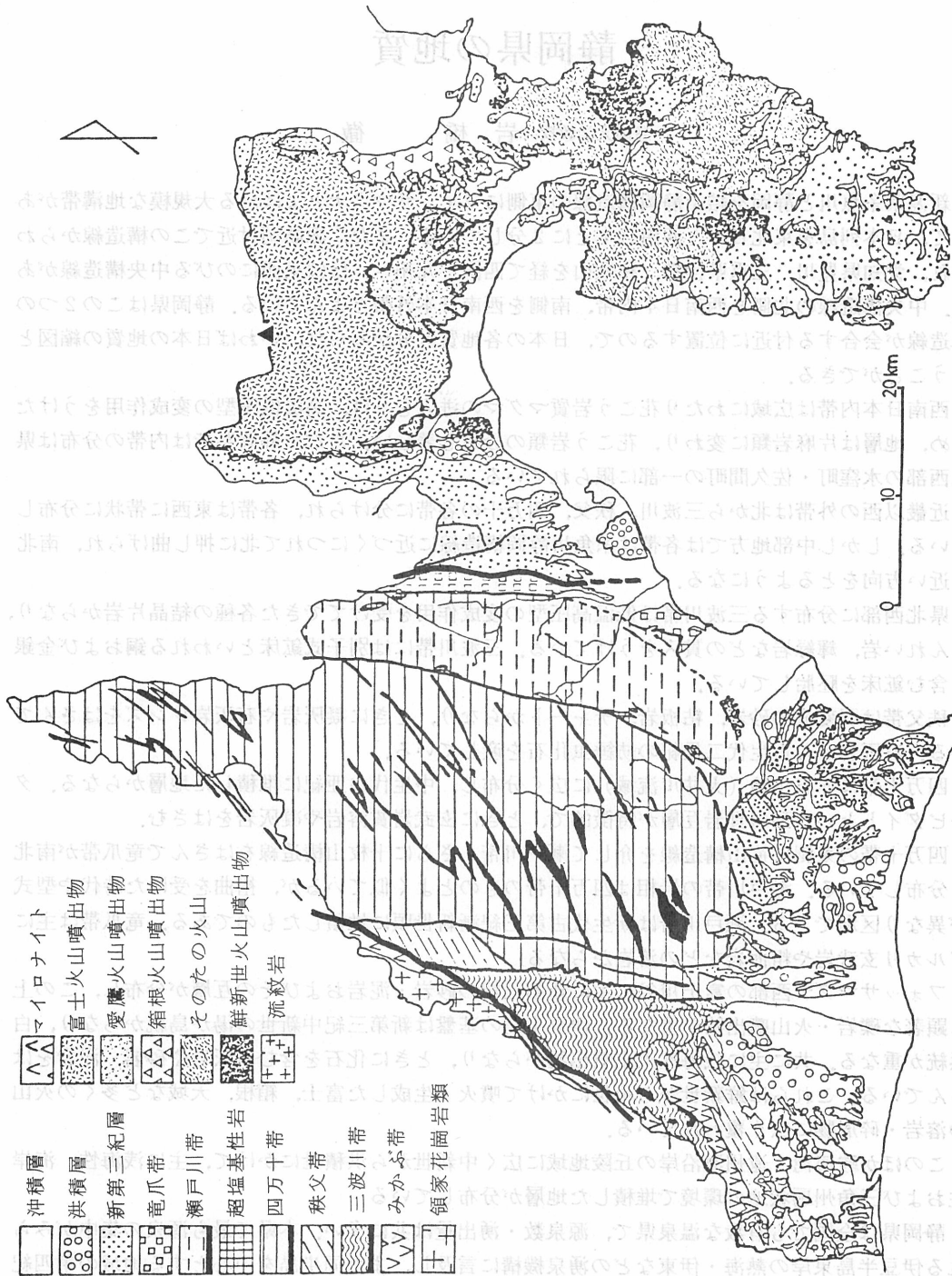
四万十帯の東側に笹山構造線を介して瀬戸川帯、さらに十枚山構造線をはさんで竜爪帯が南北に分布している。瀬戸川帯の岩相は四万十帯のものとよく似ているが、褶曲を受けた時代や型式が異なり区別できる。瀬戸川帯は新生代古第三紀漸新世頃に堆積したものである。竜爪帯は主にアルカリ玄武岩や粗面岩などの溶岩からなる。

フォッサマグナ西部の富士川谷に主に新第三紀の砂岩・泥岩およびその互層が分布し、この上に顕著な礫岩・火山噴出物が重なる。伊豆半島の基盤は新第三紀中新世の湯が島統からなり、白浜統が重なる。共に主に浅海性火出噴出物からなり、ときに化石を含む石灰岩や砂岩、泥岩をはさんでいる。これらは鮮新世から現世にかけて噴火・生成した富士、箱根、天城など多くの火山の溶岩・碎屑物に広く覆われている。

このほか駿河湾、遠州灘沿岸の丘陵地域に広く中新世から洪積世にかけて、主に浅海性、海岸性および三角州扇状地の環境で堆積した地層が分布している。

静岡県は全国でも有数の温泉県で、源泉数・湧出量は共に多い。本県で最も源泉の集中がみられる伊豆半島東岸の熱海・伊東などの湧泉機構に言及し、また同半島を中心とする地域の第四紀における火山活動の変遷と最近の地殻活動の見地から地熱ポテンシャルの分布を論じた。

温泉図説



静岡県地質図